

敏君まいる

平成26年3月

宮内東光

第一 「旅に出る」

昨年5月の連休を利用して、家内とともに、島根県大社町にある山本敏君の墓に詣って来た。

長い間ずっと、心にかかっていた。とにかく、お墓の在処を知っていて案内してくれる人がいるうちに行きたい、と思った。おいらも若くない。なんとしても行っておかねば。

出雲大社は、数十年ぶりの大遷宮とかで、ゴールデンウィークはもう随分前から宿泊施設は予約満杯で、まず旅の初日は、有福温泉という所にたまたま空室があったので、そこに泊まって、翌日、大社町を目指すことになった。有福は20年前、たまたま通りかかって、食べた蕎麦が素晴らしくうまかったので、長い間、再訪してみたいと思っていた所だった。二日目は、家内の友人が鳥取に住んでいて、その人にも会いに行き、泊めてもらおうという心算だ。

私たちの住む愛媛のちっぽけな海辺の町を出て、今治から、しまなみ海道をわたって、尾道に。あとは地道で、三次、邑南町、そして有福で一泊。翌日は、江津、大田、大社町に到着。敏君の墓参りを済ませて、午後より、松江、米子、鳥取、そして石美町の友人宅で二泊。翌々日、鳥取、倉吉、真庭、高梁、井原、福山、尾道、しまなみ海道、今治、やっと、わが町に帰着した。

3泊4日、全距離900キロほどであったが、カーナビのおかげで、あまり迷うことなく、平穩無事に行って来られた。連休で大にぎわいの大社町の町外れで、敏君の叔父上と待ち合わせしたとき、ほんのひととき、降られただけで、その雨も、まもなく上がってし

まい、その他はおおむね晴れの五月の息吹の中を、家内と二人、四人乗りのちっぽけな車で、走り続けた。重苦しいと話に聞いていた日本海も、私達の気持ちに通じたのか、優しく穏やかに見えた。本州に渡るときのしまなみ海道以外はひたすら地道を走った。



第二 「御霊屋にて」

敏君の叔父上の山本幸正氏は、74才の元気な明るい人だった。まず、山本家の御霊屋（みたまや）のある別宅に案内してくれて、当地では、仏教でなくて、神道であること、肉体と精神は滅びても、靈魂は滅びず、御霊屋に戻って来ること、従って、お墓は単に遺骸の倉庫のようなものであるに過ぎないこと、など説明してくれ、持参した線香など無用だった。私は、滋野長平君の送ってくれた分と私の分とを併せたお供えと、長平君の書いた祭文の便箋とを、彼の写真のまつってある御霊屋の前に置いて、手を合わせた。どこか私達の見えない世界から、私が出雲までやって来て、今、御霊屋の前にいることを察知して、束の間帰って来てくれているかもしれない彼の魂に祈りを捧げた。

その後、幸正氏のご自宅に伺い、昼食の出雲蕎麦をごちそうになった。敏君のこと、ご家族のことなど、話を聞いた。幸正氏は、大

変快活な方で、神道のこと、神楽のこと、敏君はじめ一族のこと、
どんどん語られ、教員生活引退後も、お忙しく、活発に活動してお
られる様子だった。今は郷土史家みたいに出雲神楽の研究などをして
おられ、また、自宅に鉄塔昇降式のアンテナを設置して、世界中
と交信記録を持つアマチュア無線家でもあった。おかし、京大医学
部の連中が泊まりに来たこと、その後、森田氏が墓参に来られたこ
となど、よく覚えておられた。

ちょうど40年前の今ころを思いおこせば、京大医学部に合格し
た敏（びん）は、山本家一族の期待を一身に担って、得意のうちに
長安の街を駆け抜けた秀才が歌ったように「銀鞍白馬 春風をわた
る」気分であったことだろう。そんな彼が、それから10年後に
は、人生に行き詰まって絶望してしまうなぞということが、誰に想
像できただろう。

出発前の私は、敏（びん）の最後の頃の状況、死に至った経緯、
それがご家族にどういう風に伝わっていたのかということ、また、
その後亡くなられたお母さんのことなどを知りたくて、思い切っ
て、訊きたいと思っていた。彼の死を知って以来、彼に対する申し
訳なきみたいな気持ちや、同級生の皆が、研究に医療活動にと、は
なやかに活躍しているように見える一方で、彼は、あふれんばかり
の才を持ちながら、ひっそりと消えて行き、その前後の事情に関し
て、皆が口にすることを何となくはばかっている、という印象に関
する不満な気持ちが、ずっと、くすぶっていた。しかし、結局一言
も切り出せなかった。

雨上がりの大社の町の、春の雑草に囲まれた墓地にある山本一族
の墓石の前に立って黙禱を捧げた。あれから、40年近くが経った
のだ。そんなこんなの複雑な思いが、もういいんだ、全てがこうし
て流れ去って行くんだ、という気持ちに押し流され、薄れて行くの

を感じた。母一人子一人の、掌中の珠のように思って来た子に、若くして先立たれた彼の母親が陥ったであろう、おそろしいような絶望を想像すると、いたたまれない気持ちになるが、彼が死んでしまい、そして、その母親も死んでしまった今となっては、全てが人



の世の流れの中の小さな一粒の砂なのだ、うねり流れる潮流の中で、大海原の暗い深い水底に散らばり、溶け込んで、分からなくなってしまうのだ、もう、どうでもいいことなのだ。なんとすることも無いのだ、と思おうとした。

30数年の無縁と薄情の彼方から、突然押し掛けて来た私達に対して、いやな顔をせず、親切に案内の労をとってくれた幸正氏に、私達は何度も礼を言い、出雲大社の町をあとにしたのだった。

第三 「息と影」

先を急ぐ私達の車の窓の外は、陽光があふれ、萌え出して来た緑が目にしみる。爛漫の春を目の前に、生と死が一つのものであると感じる。この世界はあまりにも美しい。世界はかくの如くに多嬌であるというのに、そこには何の理由も意味もないのだった。窓ガラスを下げれば、吹き込んで来る春の外気に息が詰まる。私は春に溺

れて、あえぎ、咳き込み、一瞬、生死の間に横たわる黒々とした深淵をのぞき込む。

生の側にいる僕。死の側にいる敏。二人の間には何があるだろう。敏は、この春の重い大気の中に溶け込み、あまねく僕達の周りにいるのかもしれないのだった。いやいや、僕といい彼という一個の個というものが、実は、ほんの束の間の現象に過ぎなくて、時空間として把握される世界というエネルギー体のようなものの一部が、一滴の雫のようなものになって一瞬現れ、一瞬の後に再び、果てしない大海の水に溶けこんで行って、何もなかったように元の無音と暗黒に戻るのだとしたら、個としての彼も僕も連続しているといえそうであり、そもそも僕も彼もないのだといえそうなのかもしれないのだった。

「ひとは息と影にすぎない。」

僕は、ニヒリズムに陥っているのだろうか。

左に日本海の長い海岸線が延々と続く。30年前の若き日に戻った僕は、ハンドルを握りながら、ひたすら、ぼんやりと考え続けるのだった。

第四

「敏君を祀るの文」

今夕、古いレコードを取り出し、シベリウスのカレリア組曲を聴く。

アレクサンダー・ギブソン指揮　ロンドン交響楽団演奏

四十年近く昔、君と僕は、

僕の下宿の狭い畳の部屋で、共にこのレコードを聴いた。

君は音楽のたかまりに合わせて大きく手を振り、「Lyrical！」と呟いた。

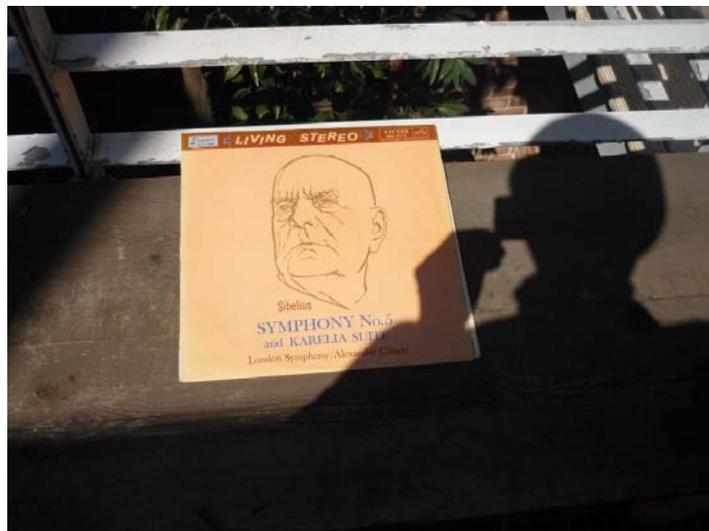
人生情有り 涙 臆を沾す
江水江花 豈に 終ひに極まらんや

三十年の歳月の後、春の日、海を渡り、山々を越え、また海に至った。

御霊屋の前に立ったとき、在りし日の君の姿を思い浮かべた。
ささやかながら、僕の真情を汲んでもらいたい。

お願い願わくは受けよ

2013年5月4日



第五 「幻」

ところで、有福温泉の蕎麦はどうだったって？

旅館の近くに一軒だけ蕎麦屋の看板がかかった店があるけど、ここだったっけ。20年も経つと、何だか違う気もする。

旅館の夕食のあとで、無理して、夜食の蕎麦を食いにしようか、と家内と相談したのだが、旅館の人に訊くと、あの蕎麦屋の親父は、10年ほど前に死に、あの店はもうありません。今あるのは別の店です、と言われて、夜食の蕎麦はやめた。20年前の有福温泉の蕎麦は幻となり、これで、有福との因縁も消え去った。



おしまい